

内外交差点

城と共にある街・姫路

「タクシー+観光」の可能性①

森田 玲子氏（姫路タクシー社長） 第1/12回

百花繚乱の桜に包まれた姫路城ほど美しいものは無い。道行く人は皆、忘我の表情でありとあらゆる「美しい」という類の言葉を発している。春の盛りにその朗報は届いた。2023年度の姫路城の外国人入場者数が過去最多の40万人に達し、過去最高だった2019年度を上回ったとのこと。

1601年に池田輝政が築いたこの白く気高い城を我々姫路市民は、愛してやまない。子どもの頃から姫路城の写生大会に参加し、隣の動物園で小さな観覧車から城を仰ぎ見た。私の通った高校は姫路城の近隣にあったため、テスト前には三の丸広場に友人と寄り道をして日本史の問題を出し合ったりした。家から姫路城が見えるというのは大きなステータスの一つで、マンションもぐっと価格が上がる。観桜会に浴衣祭り、お城祭りに姫路城マラソン等、姫路城を囲んだイベントが年間を通して催される。姫路城は姫路市民と共にある。

私はこの姫路でタクシー会社を経営していることを大変幸せに思っている。なぜなら「タクシー」というツールでありとあらゆる側面から愛する姫路に寄与できるからだ。文頭でも触れた外国人観光客・インバウンドは今最も熱い対象である。少し話は逸れるが、先日美容室に行った時のこと。今タクシー業界で最も議論されているライドシェアについて店の人に尋ねてみたところお二人ともに「それは何ですか？カーシェアではなく？」という反応であった。彼女達はタクシーを利用することもあるし、ごく普通の社会生活を送っている人達だが、一般的反応はこの程度なのかと拍子抜けした。しかし観光のことになると俄然話は盛り上がる。インバウンド、美味しいランチ、ホテルのこと、姫路にもこんなサービスがあったらいいな、など話は尽きない。これが東京の美容室での会話になると内容は変わるのかもしれない。人の求めるものはあらゆるものを超越した普遍的なもの以外、時代や地域、世代によって変わっていくのは当然で、姫路ではそういうことなのだ。もちろんライドシェアは注視しているが、タ

クシーの専門家の視点ではなく市井の人の感覚で今はまず観光、とりわけインバウンドに力を注いでいる。

こちらの読者の皆様はどれくらい姫路についてご存知だろうか。簡単に我がまち姫路についてご説明差し上げたい。兵庫県南西部に位置する姫路市は人口53万人を有する県下第2の都市である。古代から瀬戸内海の温暖な気候、地理的な優位性をもって発展してきた。奈良時代に諸国の国司に命じて編纂された風土記は五国しかないが、その一つが播磨国風土記であったことからその隆盛が伺える。時を経て江戸時代の終わり、姫路藩主の酒井忠績は江戸幕府最後の老として徳川への忠誠を尽くし続ける立場にあった。しかしその佐幕派という立場は一転朝敵とみなされることとなり明治維新以降は苦難の時が過ぎる。そして先の戦争で航空機製造工場があった姫路城下は壊滅的な攻撃を受けた。奇跡的に城が残ったことで傷ついた市民が勇気を得たことは容易に想像がつく。そして令和の今、市南部の播磨臨海工業地域では世界シェアナンバーワンの製品を多く抱え、それらの製造品出荷額は全国第2位、3兆円に迫る勢いである。エネルギー供給拠点としてのポテンシャルの高さからカーボンニュートラルポートの計画も進んでいる非常に元気なまちだ。ざっとこのようなところで姫路の姿を少しお知り頂けたらどうか。

製造業が豊かな姫路市は税収も悪くはない、新規事業所も誘致が進んでいる。しかし近年は観光に大きく軸足を置き始めた。3年前、地域経済の視点に立った観光地域作りの司令塔役を意味する観光庁の「登録DMO」として発進したのだ。

私自身、この仕事を始めた当初から観光には大きな関心を寄せていた。現在この姫路DMOの企画委員でもある。そのような場でさまざまな議論を行う中、今、一層タクシーの必要性を痛感している。

この度一年間にわたって寄稿するにあたり、私が姫路のタクシー事業者として何ができるのかを考え、実行していること、挑戦したいことをお伝えできればと思う。

